

Green Life

2002年 春号



C O N T E N T S

Green Lifeみどりのとびら... 2

心のビタミン◎INTERVIEW 造園家 小林 緑... 3

リレー座談会:

「自然の叡智」を語る... 4



司会 / 涌井史郎

桐蔭横浜大学生命環境工学研究機構長・教授

2005年愛知県で開催される「EXPO2005愛・地球博」プロデューサー

コラム1◎ 自然大好き / 木のオブジェ ... 6

コラム2◎ 自然大好き / 花のある暮らし ... 7

緑と人 和(風)の心 著者: 杉村文夫... 8

みどりを楽しむ料理... 9

ノースハンプトンゴルフ倶楽部「リユール・ドール」加藤毅シェフ

みどりを楽しむ仲間... 10

自然と関わっている素敵な笑顔がいっぱい!

MUTSUMI COLLECTION プロの道具... 12



四季を通じて目にする「みどり」の美しさ。それぞれに感動を与え続けてきたことでしよう。自然環境に添って、民俗・風土・生活があり、文化が生まれる。私達の毎日は自然（みどり）から自然（必然）に成り立ってきたのです。私達には個としての核があり、遺伝子まで帰する記憶かもしれない原体験があるように、「みどり」を美しいと感じる心は、その人の中枢に埋め込まれているはず。それに伴い、地域には地域の自然環境や文化があり、どれ一つとして同じものなく、すべて大切な生活の基礎となる。生活に不可欠な自然環境、生活に豊かさをもたらす「みどり」の役割…。皆さんで「Green Life」の本当の意味を考えてみませんか？



●私たちは「フィロス秋田」を展開し、美しく住みよい地域づくりに貢献しております。あなたも私たちと共に活動しませんか。

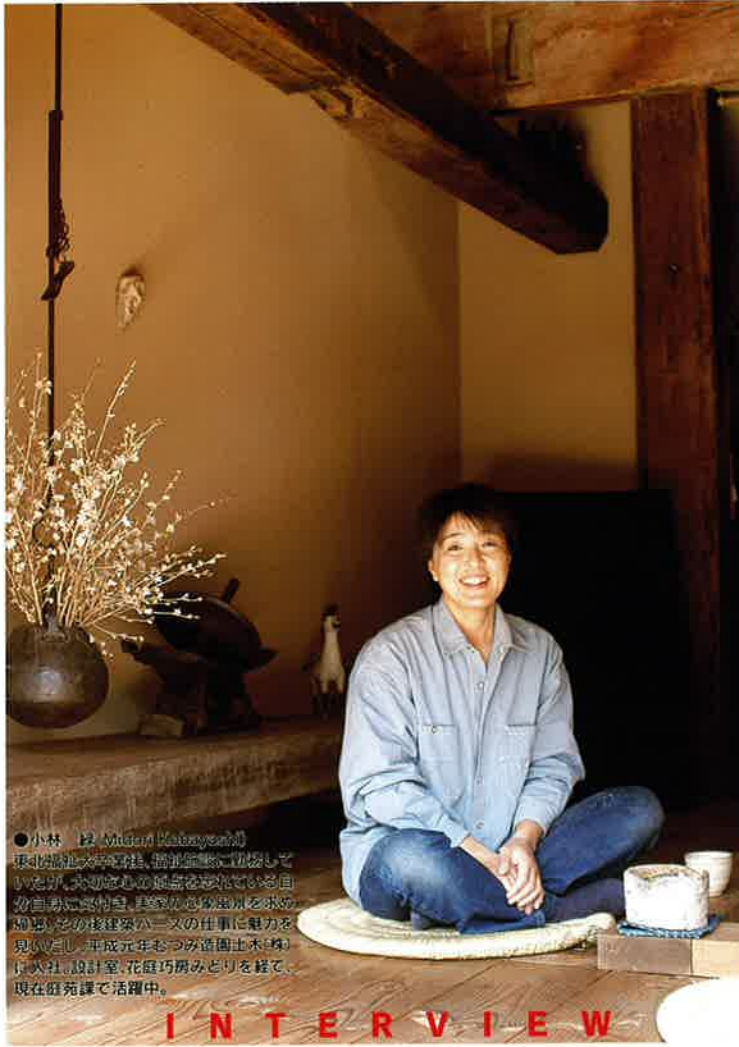
「フィロス秋田」とは、

1. 私たちは自主自尊の精神を重んじ、無名の良識ある人々が集い、奉仕活動を通じて、人と人の輪を広げ、質の高い地域社会を目指します。
2. 私たちは地域の美しい自然（環境）の保護や維持の水準を高く保ち、自然に対する畏敬の念、即ち共生の理念から知恵と汗を流します。
3. 私たちは立場の弱い人々に、埋もれている人々に、行為と友情を持って手をさしのべ、ともに豊かな充実した生活を実現するよう考働します。



『家を建てること』と『古い木を使うこと』は、私にとってごく当たり前の、自然なことだった。

◎造園家 小林 緑



●小林 緑 (Mitsuru Kobayashi)
東京府調布市在住、造園家。建築士として活動し、大切にしたいものを活かしている。自然素材が大好きで、建築家としての仕事を求め、2010年より、平成年末つみ造園土木(株)に入社。設計室、花庭巧房みどりを経て、現在庭苑課で活躍中。

INTERVIEW

あの家はタムの底に沈み、二度と日の目をみることはなかったかもしれない…。そんな家の廃材を中心に、ひとつの空間が生まれた。

今の時代誰もが、新しい家を建てるなら、快適性、利便性を求めて建てるに違いない。しかし、小林さんが建てた家は廃材を利用し、古くから使

われ続けた『古木』が主役。居間の中心には、囲炉裏があり、吹き抜け

になっている。その囲炉裏をかこんでポツポツと語り出す。語り合ううちに、なつかしいような心地よい安堵感。語る内容も何も気取らず、素の自分でいられるようなこの感じは一体何だろう…。

「平成九年の頃、東北に仕事で出かけた時に、この大黒柱と梁に出会ったんです。その場ですぐ購入を決めたんです。なんにも迷うことなく決めちゃったんですよ。」と素晴らしい宝物でも見つけたかのように語った。彼女の中では、『家を建てること』と『古い木を使うこと』は、当たり前のことであったという。「自分が自分らしく、小林緑が小林緑であるためには、この古い材料が、不可欠なもののひとつであっただけ

のこと。私にとってはごく自然なことだったんです。」と自然に語る。この古材に注がれる彼女の行為には、心のどこかに生命そのものを重んじるものが、人一倍強いからこそあって、当たり前のこと、自然なことと言えるのだらう。



「家を設計してくれた人との出会い、大工さんとの出会い、この家に使われた廃材たちとの出会い。いろんな巡り合わせで出来上がったこの家で、自分がどんな風に生活するか、コーディネートしていくのが私の役目なんです。」と語る小林さんの考え方は、そのまま仕事でも同じなのかもしれない。庭の形がきちんといて、初めてそこで花も活かされるのと同じように。与えられた環境、そこにある草、木、花を彼女流でコーディネートする。そこに『小林緑の世界』が生まれていく。小林さんの回りに、沢山の仲間がいるのも、この自然体で物事を受け止める『小林緑流』のおかげかもしれない。

彼女は今、自然に吹きこぼれる風をも当たり前のこととして、自然体で生きている。そして新しい春の風が、造園家『小林緑』に囁いている。『小林緑流』でガンバレ…と。



居間から吹き抜けを見上げると、寝室の障子窓が見える。この窓から見下ろすと、写真右下の景色が。



大黒柱のへこみには観音様が。この楽しみ方が「小林緑流」。



アフリカ・ドコン族の扉をオブジェにしたお気に入りのスペース。居間から書斎へ続く廊下にあたる。



居間に続いている2畳の和室。茶室のような落ち着いた空間には、ベトナム・中国・アフリカなど、各国の雑貨を飾って。



春のまばゆい光があふれる縁側から見た居間。外との境界線を無くし、自然な空気の流れが感じられる家がよく解る。

自然には人の心を動かす
偉大な力が潜んでいる

えいち

「自然の叡智」

を語る



すよ。庭というのはいつも、人の生活と共にあるわけですから、日本人はいつも自然と一緒にいたい、という欲求があつて庭では特にそれがやり易い。その時、躯体という枠組は非常にしっかりと人工でつくる。これは英国のガーデンングというのと同じだと思っただけだ。

満井 やつぱり自然の流れですね。

杉村 同じような流れなんです。人が自然に囲まれて暮らしたいという点では。もちろんその表現は全然違うんですけど。英国などはワイルドフラワーが咲き

乱れているだけで絵になる。これを日本の一般的な住宅でやるとちやつちい。それは躯体が甘いからだと思っんです。向こうは壁でも石レンガでしっかりして

雪も解け、芽吹き出した秋田の春。誰よりもこの春を待ち焦がれていたのは、花や緑たちなのかもしれない。そして、この命に心もほころぶ…

雪。秋田はいいところですよ。特に「雪月花」という言葉を思い出します。雪と月って似合いますよね。また、雪に鍛えられた花の色って美しい。

口の皆さんそれぞれから語って頂きたいと思っます。

満井 たとえば、図柄とか材料とか、どんな風にリース作りをされているんですか？

佐藤 自然が身近にありますのですべて自然のものを利用してあります。

残雪からの芽吹きが何よりもうれしくて、もうワクワクするんですよ。

杉村 残雪からの芽吹きが何よりもうれしくて、もうワクワクするんですよ。

満井 さて、今日は「自然の叡智（えいち）」と題し、造園、リース（造形）、料理、押し花、そして出版についてのプ

ロの皆さんそれぞれから語って頂きたいと思っます。

すよ。庭というのはいつも、人の生活と共にあるわけですから、日本人はいつも自然と一緒にいたい、という欲求があつて庭では特にそれがやり易い。その時、躯体という枠組は非常にしっかりと人工でつくる。これは英国のガーデンングというのと同じだと思っただけだ。

加藤 毅 (Takeshi Kato) 東京都出身
名シェフ三國清三氏に師事、現在ノース
ハンプトンゴルフ倶楽部レストラン
『リユール・ドール』の料理長。現在秋田市在住。



佐藤たず子 (Tazuko Sato)
能代市在住のナチュラルクラフト作家。自然素材を自分で探し、籠やリースなどのオブジェを創作し、数々の個展を開いて活動。

杉村文夫 (Fumio Sugimura)
むつみ造園土木(株)取締役専務
日本人の心、文化を大切に考え、
日本庭園を愛する造園家。





涌井史郎 [雅之] (Shiro Wakui)
東京都出身。造園家。
桐蔭横浜大学生命環境工学研究機構長・教授。

造園家として、ハウステンボス等の計画・設計で学会賞を受賞。大学では緑や花のもたらすストレス低減の効用の研究と、生命・医用工学分野のプロジェクト研究の総括マネージメントを行っている。最近EXPO2005「愛・地球博」のランドスケープ・コーディネーターに就任。今、その計画に取り組んでいる。またTBS、サンデーモーニング等にセミ・レギュラーとして出演する等、テレビを通じ造園家として今まさに注目の人物である。

涌井 食文化は大変豊かになったのに比べて味覚は狭くなった気がしますね。身土不二というか、その土地にしかないものを味わうことも大切ですよ。例えば「しょつつる」。秋田の人ですらあまり食べなくなっていると聞きます。ところ

加藤 自分たちの年代では、その微妙さがわからない人が多いような気がしますね。たとえば、辛味と酸味。塩辛いと酔っぱいが同じ。また、ファーストフードの味に慣れてしまっているような気がします。

涌井 桜の季節、私と家内はその花を食べ

ちがうんです。すると、一本づつ味が花を食べるのに、なぜ人は食べないんですかね。ベコニアなどは美味しいですよ。花は熱を加えないで刺身がいい。

杉村 リースとかいうと、すごく手軽なイメージがしますし、いつそのこと造形とか、何か特別な名称を作ってしまった方がいいのかもしれないですね。



佐藤たず子/作
木の皮や葉などを使った斬新なリース

リース素材はどこにでもあ
身近な自然にほんの少し
目をむけてくれたら...

杉村 佐藤さんは実際、山へ行って自分で材料を採ってきて作っているんですね。

佐藤 はい。材料もすべて自分で収集してきて作っています。

涌井 ナチュラルクラフトという言葉どおりですね。四季を通じ材料を集める段階から、すでに作品のイメージが膨らみ楽しんでおられる。

佐藤 はい。そのとおりですね。そのへ

んを歩いていてもこれは材料になる、とかついそんな風に木や草を見てしまうことがよくあります。山の中に入っていくなくても、結構身近なところにも素材はあるものです。そうゆうことに皆さんももっと気がついて欲しいと思います。

涌井 佐藤さんのリースは、枯れた植物にもう一度「生」を吹きかけ、作品化する

ることにより活かす力を与えているって感じがします。

杉村 花の香りさえ伝わる気がしますね。

佐藤さんのリースは、単純なリースとちがって、自然の息づかいとか、力強さみたいなものが感じられる。自然の力が出ている気がしますよ。

涌井 リースという言葉では語り尽くせませんね。

杉村 リースとかいうと、すごく手軽なイメージがしますし、いつそのこと造形とか、何か特別な名称を作ってしまった方がいいのかもしれないですね。

菊池謙一 (Kenichi Kikuchi) 東京都出身
女性誌・月刊「SAY」(青春出版社)の編集
長を経て、現在男性誌・月刊「BIC tomorrow」
(青春出版社)の編集長。



平田睦子 (Muthuko Hirata) 宮崎出身
現在は秋田市在住。イギリスで開かれた「世界押花絵画展」で銀賞受賞、「世界押葉ポストカードコンテスト」佳作受賞、アメリカ・「フィラデルフィアフラワーショー押花コンクール」クラス146部門銅賞受賞など沢山の賞を受賞している。押花教室の他白い磁器、陶器に手軽な絵付けができる「ポーセラーツ」(秋田では初めて)の講座も開催。



「自然の叢智」を語る

自然には人の心を動かす偉大な力が凝縮している

がベトナムやタイには「しよつつる」と同様の調味料があり、それを好む日本人がわざわざ食へに行く。おかしな話ですよね。「しよつつる」も少しアレンジして味わう工夫をすれば、もつとその品位と味わいを楽しんで食へることができるの……。

加藤 食べる楽しさ、採る楽しさをもつともつと日本人は楽しんだ方がいいですよね。

満井 加藤シェフ。料理の名人として、秋田にきて、その自然とかわるることにより、なにか料理が変わりましたか。

**お皿の料理が
四季そのものであり、
その中にどのような
花や緑の自然を感じて
頂くことができるのか……。**

加藤 秋田にきてから、自分で採って食べる楽しさが増えましたね。山菜とか……

料理人として花や緑の魅力に対して、料理食材として向いあうことは非常にすくないと思います。私を含むすべての料理人において言えることだと思いますが、私の描くお皿の料理が四季そのものであり、お客様がその中にどのような花、緑、自然を感じて頂けるのか。常に求めているのは、一定の決まった枠にはまらない(こだわらない)不特定多数なビジュアル



イギリス・「世界押花絵画展」Japan2001コンクールにて銀賞を受賞した作品「We are not alone(ひとりぼっちじゃない)」

人はひとりでは生きていくのではないということを、人は誰かが自分か思っているよりはるかに、人に愛され支えられているのだということを、[We are not alone] 伝えたくて。

的要素。それがインスピレーションとなつて料理に表現することで、お客様に自然を感じてもらえたらうれしいことです。料理を食べた時の満足感というのは、人が自然にふれて感動する気持ちそのものだと思います。料理人として、常に繊細な感性と慎み深い態度で臨みたいと思っています。

満井 平田さんは九州出身と伺いましたが、秋田での生活はいかがですか？

平田 秋田はともいいたるところですが、秋田の人はあまり外のものを求めない。自分の枠の中だけに気を使います。京都に住んでいたときは、自分が求めようと思うものは求められていたけれど、秋田の人は外に求めないので手に入らないものが多い。発信することが下手なようですよ。発信する場も少ない……。自分たちが小さいときには自然から教

自然から学んだ沢山のことを
今の子どもたちにも伝えたい。
心のメッセージを
作品が伝えてくれる。

えられていたことが、今の子どもたちにはそれがわからない。観察力とか、食べることとか、作ることを、体感することを教えてあげるのが私たち大人の役目になった気がします。

杉村 都会っぽい生活になつていなくて、

満井 平田さんの作品にはその自然が実に素直に、デフォルメされ巧みに表現されていますよね。秋草図とか武蔵野図を思わせます。

平田 昨年ヨーロッパの世界押し花絵画展で賞(銀賞)をもらった作品の「We are not alone(ひとりぼっちじゃない)」は、ブルビネラの花を使ったのですが自然を活かしたメッセージを込めた作品で、私のなかではとても自由なもので、この作品が人の心にひびき、受け入れられたということがこれからの私の作品のキーワードになりそうです。アメリカのフ

イラルファイアの作品展でも賞(銅賞)をいただきましたが、アメリカではポストカードやメッセージカードのような、はっきりとした色合いやデザイン性の高いものが受け入れられやすいのです。アメリカでは、枯れ葉とかはだめなんです。杉村 派手さを好むお国柄ですからね。

◆自然大好き



のオブジェ

佐藤たず子さん

私たちは自然の恩恵をたくさん受けている。その自然素材を自分で採集し、創作している佐藤さんの作品は既製品にはない自然の気を感じる。

自宅近くの田んぼのまわりや、里山、またある時は海まで足をのびして材料を採取。葉っぱ、石ころ、小枝、流木、とちの美：自然のものはなんでも贈り物だ。そして佐藤さんの魔法の手々にかかれば、すべてステキな作品へと生まれ変わる。

「自然には裏切りもないし、穏やかな気持ちで立ち向かえます。今はリース素材もお金を出せばどんなものでも手に入ります。でも身近にもいろんな素材がごろがっついています。目を下(大地)へ向けると、優しくなれるんですね。自然の力を感じてもらえれば」

佐藤さんにとって「収穫」は素材以外にもたくさんありそう。

少女時代に遊んだ「マリ」を思い出しながら創った作品『春』は、やさしい暖かなイメージ。



平田 その国によって好まれ方が違うのですが私はヨーロッパのような、自分の中にあるものを作品に表現することを続けていきたいですね。

平田 医学書から始まって、現在の方法まで見つけたし特許をとっている方法なんです。水分の多いものは、一旦新聞紙で半日吸い取ってからやると色がきれいであります。台紙自体に薬品が染み込ませてありますから即効で乾燥させることができます。

平田 そんな技法がキャブテックの時代にわかっていたら、絶滅した数々の植物がきれいに残せた。

平田 ところで、雑誌の世界の「花」とは何でしょうか？

女性誌での「花」は必要不可欠な一部。女性誌は「花」男性誌は「華」

平田 今は男性誌・月刊「BIG to morning ビッグ・トゥモロウ」の編集ですが、その前は女性誌の月刊「SA Y セイ」の編集を10年間やっていました。花は女性誌の中では、脇役なんです。よく雑誌の中で埋草（あいているスペース）に花を入れます。花は季節感をだし、女性を引き立ててくれます。今は、犬など動物を使うことも多いのですが、犬を使ったときは、後のページに料理とかは入れられない。動物は臭いを運ばせるんです。でも、花の場合はどんなものが後にきてもほとんど大丈夫。花は、いろんなものに適応しやすいんです。犬の場合はファッションページなどではOKですね。

平田 そうか、視覚から嗅覚まで想像させるんですね。

平田 そうなんです。ですから、女性誌では「花」が非常に多く使われていますね。

平田 女性に花をもたせる…ですね。菊池 花は女性誌としては、使えばよくなるオールマイティなもので、花の匂い

を感じとれるプラスイメージにつながります。そして月刊誌などでは、季節感を出すことも可能になるのでとてもいいですね。

平田 人の気持ちを慰めてくれますよね花は…。

菊池 癒しの存在ですね。

平田 熟年女性誌の、婦人画報なんかでも巧みに花のページが織り込まれてますよね。

平田 女性誌では、内面的なものが受け入れられやすく、男性誌はコンペティション的なものが受け入れられやすいんです。女性誌で、略奪愛とか攻撃的な記事の場合は電話の苦情があったりもしますし、内面的なものの方がいいですね。男性誌は出世の話とか、「花」はほとんど出てきませんね。

平田 「花」は、はなでも「華」のほうですかね。(笑)

菊池 そうですね。

平田 今日はそれぞれのプロのお立場から花と縁にまつわるお話を伺いました。たつた一輪の花があるだけで季節やうらおい癒しを人々に与えてくれます。そしてそうした花々は緑の内にもあると美しく。我々人と花と縁は「生命あるもの」として同じ仲間です。

その仲間達をもっと暮らしや街の中に取り入れ、仲良く生命を愛しむ世紀として、我々も楽しみながら、子孫の時代に引き継ぎたいですね。



花だけでなく、山菜「わらび」を使った作品。

◆自然大好き 花

のある暮らし

平田睦子さん

1995年12月、押し花インストラクターの資格を取得して以来、植物ひとつひとつの個性を表わすと共に、擬人的に扱うことによって、創りあげる独自の押し花アートの世界を展開。人々の心に深く入り込み、語りかける作品を生み出している。

「技術的なものはマスターすることが出来ませんが、悲しいこと、嬉しいこと、自分が素直に感動する気持ちがないと…、これからはずっと、心とメッセージ(言葉)をもった作品を創っていきたくですね」と語る平田さんの作品には、まさに押し花アートのひとつの方向性を指し示している。今春、故郷の宮崎で「母・娘二人展」を開催予定。お母様の絵画と押し花とのジョイントである。次は秋田で…。